東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　67: 399－407，2016.

日本語学習者向けの擬音語・擬態語の学習指導

許　　夏　玲*

留学生センター

（2015年9月16日受理）

1．はじめに

擬音語と擬態語は，一括して「オノマトペ（onomatopoeia）」という総称として呼ばれることがある（田守ら1999）。本来なら，「オノマトペ」は擬音語を意味するもので，「実際の音をまねて言葉とした語」であると定義づけられている（『広辞苑』1998）。そこで，擬態語は「オノマトペ」に含まれていないのである。擬音語・擬態語に関しては，従来「外界の物音・人間や動物の声，物事の様子や心情を直接感覚的に表現する言葉」（『現代擬音語・擬態語用法辞典』）であると定義づけられている。擬音語は，さらに擬音語と擬声語の２つに分けられる。前者は，物音を表す表現であるのに対し，後者は人間や動物の声を表す表現である。本稿では，擬音語と擬声語を一括して擬音語という表現を用いる。

マンガと言えば，日本のポップカルチャーの一つとして世界中によく知られているが，マンガの中で擬音語と擬態語が多く用いられていることを知らない日本語学習者も多いだろう。マンガでは話し言葉の表現が多く用いられており，表音文字である日本語の仮名は，その音声的特徴が日本語の擬音語の豊かさに寄与していると言える。なぜマンガには擬音語と擬態語が多く用いられているかと言えば，マンガには，話し言葉の多用，紙幅の制限（１ページのコマ数），表現の短縮，視覚的・聴覚的なイメージの強調などの特徴があるため，擬音語と擬態語はマンガの主要表現として最適ではないかと考えられる。

一方，日本語の擬音語と擬態語に対し，中国語には「象声词」（日本語の擬音語に相当するもの）はあるが，日本語ほど多くないし，擬態語という表現もない。しかし，言語とは人間の用いる道具の一つでもあり，ユニバーサルな面があるものである。中国語では，「成语」（ことわざ），形容詞，副詞などの組み合わせによって，物事の状態を表すことができる。というわけで，中国語にも擬態表現があると言えよう。

英語の擬音語と擬態語に関しては，田守ら（1999）では日英語に類似点が見られるものの，同じ動作を表すのに英語の語彙が日本語ほど多くないと述べられている。例えば，戸や窓を思い切り閉める動作を表す場合，日本語では「ばん，ばーん，ばたっ，ばたん，ばたんばたん，ばたり，びしゃっ，びしゃり，がちゃん，ぱたん，ぴしゃっ，ぴしゃん，ぴしゃり」などの表現を用いられるのに対し，英語では “slam, bang, shut” などの表現が用いられる。

2．擬音語と擬態語の認定基準

これまで擬音語・擬態語は，「外界の物音・人間や動物の声，物事の様子や心情を直接感覚的に表現する言葉」（『現代擬音語・擬態語用法辞典』）であると定義づけられている。また，擬音語・擬態語は，対象物の状態や音声を修飾するために用いられている副詞が約90%を占めているという。擬音語・擬態語の特徴（促音，反復音など）をもつ，似たようなものが存在しており，「きっと」「いちいち」「なかなか」「いろいろ」などはそれである。これらの表現を擬態語と見なしてよいかどうかは疑問である。

そのほか，マンガの場面や人物の心情などに合わせて造られた擬態語・擬音語の表現，いわゆる造語（た

＊　東京学芸大学 留学生センター（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）

とえば，「ボゴォ」「ドヒュウン」「どきゅーん」「ぺとっ」）というものがある。

これらのものを前述の擬音語・擬態語の従来の定義に沿って考えると，擬音語・擬態語と認定する境界線が実に曖昧であると筆者は思う。

田守（1999：188）は「特定の言語体系の中での語の範疇化と関係する言語学的な見方」を示唆し，言わば「表面的にオノマトペと思われる語が一般語彙と区別できる構造的あるいは機能的な特徴を共有しているかどうか」に着目するという見解を示した。そこで，先行研究をふまえて，以下，まず日本語の擬音語・擬態語の音韻特徴から見てみよう。

２．１　擬音語と擬態語の音韻特徴

(I) 母音

母音 a, i, e, o のうち，e, o の音が最も少ない。e の付く擬音語・擬態語は，あまり品のいいイメージを表さない表現が多く見られる。例えば，「げっそり」（急剧消瘦 “devastatingly lose weight”），「げっぷ」（打嗝儿 “belch”），「べらべら」（喋喋不休 “chatter”）などの表現がある。

i の音は，「きらきら」（灿烂 “to twinkle”）などのような小さいこと，動きの速いことを表す。それに対し，a, o の音は「ばらばら」（零乱 “to break into pieces”），「ぼろぼろ」（破破烂烂 “worn out”）のような大きくて重い物の音を表す。

(II) 清音と濁音

濁音 g, z, d, b は，大きいものやネガティブなイメージのものを表すのに対し，清音 k, s, t, h は小さいもの，ポジティブなイメージのものを表す。例えば，「さらさら」（干爽 “cool”）と「ざらざら」（不光滑 “rough”），「きらきら」（灿烂 “to twinkle”）と「ぎらぎら」（晃眼 “glaring”）はその違いである。

(III) 拗音

拗音は一般に，俗語的で品が欠けるというイメージが受けられる。「めちゃめちゃ」（乱七八糟 “in a mess”）はその例である。

(IV) 特殊音と反復形

田守（2003）によると，日本語の擬音語と擬態語には形態的にも意味的にも似ているものがあると言う。例えば，２モーラの語基に促音，「り」語尾，撥音が伴った形，または語基の反復した形はそれである。促音は「スピード感，瞬間性，急な終わり方」，「り」語尾は「ゆったりした感じ，完了（一区切り）」，撥音は「響き，勢い」，反復は「連続，繰り返し」といった意味の特徴を持っている。その例として，「ぱくっ」（张开大嘴 “to open the mouth wide and bite something instantaneously”）「ぱっくり」「ぱっくん」「ぱくぱく」が挙げられる。

２．２　擬音語と擬態語の形態特徴

田守ら（1999）では，日本語の擬音語・擬態語は統語的に副詞，動詞，名詞，形容詞/形容動詞として働くことができると述べられている。ここで田守の述べられている日本語の擬音語・擬態語と見なされる要素と特徴を整理し，次のようにまとめた。

２．２．１　副詞用法

擬音語・擬態語の副詞用法には，動作の様態または状態を表す「様態副詞」「ばたばた（慌慌张张 “busy”）」，「くっきり（清楚 “clearly”）」など，状態の変化を引き起こす起動動詞と共起する「結果副詞」「ぴかぴか（に磨く）（闪闪发亮 “nice polish”）」，「こんがり（焼く）（恰得好处 “brown”）」など，状態性の意味を持つ語の程度を限定する「程度副詞」「めっきり（と減る）（显著 “remarkably”）」，「どんどん（伸びる）（连续不断 “along”）」，実現された事実の回数を表す「頻度副詞」「ちょいちょい（行く）（常常 “often”）」，「ちょくちょく（顔を出す）」（常常 “often”）」という四種類のものがある。

２．２．２　動詞用法

いくつかの異形を持つ擬音語・擬態語の中で動詞として働くものがある。たとえば，「いらいら」（焦急 “impatience”），「がたがた」（摇摇晃晃 “shaky”）は「～する」，「～つく」という形態として用いられることができる。そのほか，「ゆらゆら」（飘飘摇摇 “sway”）は「ゆらめく」，「ゆらす」，「ころころ」（叽里咕噜 “roll”）は「ころげる」「ころがす」「ころがる」のように動詞と関連しているものもある。しかし，これらは擬音語・擬態語から動詞へと転じたものかどうかはまだ究明されていない。

２．２．３　名詞用法

名詞用法として単独に用いられるもの（「いらいら（焦急 “impatience”）が募る」「ひらひら（飘动）のスカート」）とほかの名詞と複合したもの（「きらきら星」「びっくり箱」）や組み合わせて造られたもの（がりがり＋勉強→「がり勉」）がある。

２．２．４　形容詞・形容動詞

動詞用法と同様に，擬音語・擬態語の形容詞・形容動詞の用法がある。例えば，「たどたど（蹒跚 “halting”）

→たどたどしい」「ゆるゆる（緩慢 “slowly”）→ゆるやか」「くどくど（罣嗦 “pick at”）→くどい」などのものがある。

以上のように，擬音語と擬態語は様々な形態を持っており，ほかの語彙と似たものもある中で一言擬音語と擬態語を定義づけるのはそう簡単ではないことがわかる。

２．３　語彙性と直接的な模倣度

擬音語と擬態語の範疇に属する条件として，田守ら（1999）では「語彙性（lexicality）」と「オノマトペ度（mimeticity）」が取り上げられている。前者は，ある語が言語の中で語として機能している程度を指し，後者はある語が話者によって直接的な模倣として認識される程度を指す。しかし，「語彙性」と「オノマトペ度」は必ずしも田守で述べられている正反対の関係にあるものではなく，場合により両者が同等の関係を示すこともあると筆者は考えている。

田守ら（1999）説を参考に，筆者は「語彙性」と「直接的な模倣度」（擬音と擬態）の相関関係を次にように考えている。

①　典型的な擬音語・擬態語

・「語彙性」+「直接的模倣度」

例：「犬がワンワン鳴いている」「このワンワンが一番可愛い」

「花びらがひらひら舞い落ちる」「スカートにひらひらのレースが付いている」

上記のものが副詞用法として用いられる際，引用助詞「と」を義務的に付けなくてもいい。

②　非典型的な擬音語・擬態語

②-1　定着語

・「直接的模倣度」＞「語彙性」

例：「この周辺をグルッと一回りする」

「バタンとドアを閉める」

これらのものがいきいきとした臨場感，「グルッという回り方で」「バタンという音で」のようにその現場を再現するため，「直接的模倣度」は高いが，引用括弧や引用助詞を義務的に付けることから「語彙性」が低くなると考えられる。これらの語尾に促音や撥音が付いているのが特徴的である。

・「語彙性」＞「直接的模倣度」

例：「一度ゆっくり（と）話してみる」

「つまらないことにくよくよしない」

上記の語は，引用助詞「と」を義務的に付けないことから現場を再現する意味合いが薄れると考えられる。

しかし，「この仕事は来週までにきっと仕上げられる」の「きっと」は話者の確信を表す意味で用いられ，引用助詞の「と」を義務的に付けるとされているが，「金属的な摩擦音」を表す本来の意味合いから薄れて転じてきたという説や「急度（きと）」の促音化したという説もあり，「直接的模倣度」が低くなるものと考えられる。

②-2　造語

・「直接的模倣度」

マンガの場面や人物の心情などに合わせて造られた擬音語・擬態語，いわゆる造語（たとえば，「ボゴォ」「ドヒュウン」「どきゅーん」「ぺとっ」）というものがある。これらは，現場を再現するものであるため，引用構文として用いられることがなく，引用助詞が付かないのほうが普通である。

以上，日本語の擬音語・擬態語と見なす条件をまとめると，その語が言語の中で完全に機能しているか（語の異形，品詞の働きなど），言わば「語彙性」とその語の使用に対する母語話者の容認度がどの程度あるか，言わば「直接的な模倣度」に対する認識の度合いで決められると考えられる。

３．日本の日本語教科書の中の擬音語と擬態語

現実には，多くの外国人日本語学習者が日本語の擬音語・擬態語の存在に気づいていないと言えよう。これは，このような表現が主に日常に用いられ，日本語の教科書にはあまり取り上げられていないからだ，と考えられる。教師が日本語の文法や表現を教えるだけで精いっぱいで，擬音語・擬態語のような二次的なものは置き去りにされているのではないかと思われる。

筆者は，日本語教科書で擬音語と擬態語がどのくらい取り上げられているのかについて，調査を行ってみた。今回，調査対象とした初級～上級の日本語教科書は，現在一般に日本語学習に使用されているもので，下記の通り計17冊である。

『日本語初級１　大地』(2008) スリーエーネットワーク
『日本語初級２　大地』(2009) スリーエーネットワーク
『みんなの日本語』初級 I（1998）スリーエーネットワーク
『みんなの日本語』初級 II（1998）スリーエーネットワーク
初級日本語『げんき』I（1999）The Japan Times
初級日本語『げんき』II（1999）The Japan Times
『中級へ行こう』(2004) スリーエーネットワーク

『聞いて覚える話し方　日本語生中継 初中級編』(2006) くろしお出版
『聞いて覚える話し方　日本語生中継 中上級編』(2004) くろしお出版
『会話のにほんご』（2007）The Japan Times[中級]
『日本語５つのとびら　サバイバル編』（2007）凡人社
『日本語５つのとびら　初級編１』（2009）凡人社
『日本語５つのとびら　初級編２』（2010）凡人社
『日本語５つのとびら　中級編』（2010）凡人社
『日本語５つのとびら　中上級編』（2008）凡人社
『コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語 上級へのとびら』（2009）Kuroshio Publishers
『日本語上級読解』（2001）アルク

調査結果は次の表１にまとめられる。用例数は出現回数に関わらず，同じ表現であれば，1回と異なり語数のみを計算した。（＊表現の表記は本文のままを引用する。）

表１　日本の日本語教科書の擬音語と擬態語

日本語教科書	用例数	表現
『日本語初級１大地』	1	ちょっと
『日本語初級２大地』	2	はっきり ゆっくり
『みんなの日本語』初級 I	3	ちょっと ゆっくり だんだん
『みんなの日本語』初級 II	2	きちんと ちゃんと
『初級日本語　げんき』I	2	びっくり ゆっくり
『初級日本語　げんき』II	3	めちゃくちゃ びっくり ぺらぺら
『会話のにほんご』（中級）	70	ずっと どうどう あっさり くよくよ ゆうゆう ちゃんと ちょっと しっかり だんだん どんどん ペコペコ ぼんやり ほっと さっぱり グラグラ ガチャン ガタン ミンミン サッと おろおろ トントン パクパク じろじろ ゴロゴロ ポキッと ボッキ シトシト ザーザー ニャーニャー ワンワン コケコッコー モーモー メーメー チューチュー ホーホケキョ ガヤガヤ ゲラゲラ バリバリ カーカー ボーボー ギャーギャー ドキッ ドサッ ペラペラ うろうろ じろじろ どんどん どきどき いらいら くたくた しょんぼり ぴかぴか つるつる すやすや ふらふら ぐっすり こっそり はっと ほっと ニコニコ チョキチョキ ボーボー コロコロ ぐすぐす びくびく キラキラ ザブーン ガチャン コチコチ ゆったり
『５つのとびら　サバイバル編』	1	ちょっと
『５つのとびら　中上級編』	4	きっぱり ほっと のんびり はっきり
『中級へ行こう』	1	つい
『日本語生中継　初中級編』	13	ちょっと ずっと そろそろ ゆっくり じっと

		ごろごろ むかむか ぞくぞく くらくら かんかん かっか わくわく いらいら
『日本語生中継　中上級編』	10	ちょっと しぶしぶ すっきり はっきり ずっと ひょっと ニコニコ さっさと にこり わざわざ
『上級へのとびら』	1	びっくり
『日本語上級読解』	18	つい ぼー ガブリ オズオズ パカッ ハッキリ ゆったり ハッ がっくり ケロッ おろおろ ばんばん ぶつぶつ こっそり うとうと くっきり ひっそり さあ

擬音語・擬態語は，対象物の状態や音声を修飾するために用いられている副詞が約90%を占めている。ということで，初級の学習者向けの日本語教科書に取り上げられている「ちょっと」「びっくり」「ゆったり」「だんだん」などの副詞は実に擬態語そのものである。多くの初級学習者はこれらが擬態語であるということには気づいていないのではないかと思われる。

擬態語と擬音語は，日常会話によく用いられている。上記の中級の日本語会話教科書（『会話のにほんご』）には擬態語と擬音語の課が設けられており，その課で様々な表現（人間の動作/状態，雨の降る音，動物の鳴き声，物事の状態など）が取り上げられている。しかし，ほかの課の会話文には擬態語と擬音語の表現がそれほど現れていなかった。

擬態語と擬音語は，話し言葉の表現として用いられるのみならず，その表現を用いることによって，音や状態を細緻に描写することができるし，生き生きとした自然な日本語を表すこともできるため，上記の読解教材（『上級日本語読解』）にも擬態語と擬音語の用例が現れた。

今回，調査対象とした教材の擬音語と擬態語の中で，擬態語が多く取り上げられていることがわかった。なお，ほとんどの教材では，物事の状態を表す擬態語「ちょっと」「ゆっくり」「はっきり」が取り上げられている。しかし，擬態語の多くは，人間の気持ちや感情，動作を表すものと見られた。その他，擬態語と擬音語は状態や音声の表現効果を目立たせるため，カタカナで表記されることも多く見られた。

4．中国の日本語教科書の中の擬音語と擬態語

陳（2014）では中国で使用されている代表的な9冊の初級日本語教科書の中の擬音語と擬態語を調べ，それらの使用頻度と教科書での記述をまとめた。以下の表2はその9冊の教科書に用いられた擬音語と擬態語を上位順に示す。

表2　中国の日本語教科書の擬音語と擬態語

表現	使用頻度
ゆっくり，そろそろ	9
のんびり	8
びっくり	6
しっかり，すっかり	5
だんだん，どんどん，ちゃんと	4
きちんと，うっかり	3
はっきり，ぴったり，じっくり，さっぱり	2
きらきら，じっと，すいすい，がたがた，にこにこ，ごろごろ	1

上記の表の擬音語と擬態語は，人間の状態を表すのに用いられているということである（陳2014：38）。たとえば，「ゆっくり読みたいですから」「そろそろ帰ろうと思います」「びっくりした」「しっかりしなさい」「のんびり暮らせそうだ」「だんだんわかるようになりました」「ちゃんと薬を飲んで」「すっかりご馳走になりました」「はっきり覚えていませんけれど」「じっくり読むことにします」（下線は筆者によるもの）などのように，日本語教科書で導入されているのは擬音語より擬態語のほうが多く見られ，またこれらの擬態語が人間の状態や気持ちや動作と関連しているものがわかる。

5．日本語学習者向けの擬音語と擬態語の選定

日本語の擬音語と擬態語は１冊の辞典に掲載されるほど様々な形態と豊富な語彙数がある。初中級の日本語学習では，多くの擬音語と擬態語の中から学習者向けのものを選定する必要がある。

三上（2006）では，日本語教科書及び一般の言語資料（新聞，雑誌，映画，アニメ作品など）における擬音語と擬態語の使用状況を調査し，その結果として以下の70語を日本語教育のための基本の擬音語・擬態語を提議した。

あっさり	いらいら	うっかり	うろうろ
うんざり	がたがた	がっかり	がやがや
からから	がんがん	きちんと	ぎっしり
きらきら	ぎりぎり	ぐっすり	ぐっと
くるくる	ぐるぐる	げらげら	こっそり
ごろごろ	ざあざあ	さっさと	さっと
ざっと	さっぱり	さらさら	しっかり
じっくり	じっと	じろじろ	すっかり
すっきり	すっと	すらすら	ずらり
そっくり	そっと	そろそろ	ぞろぞろ
たっぷり	ちゃんと	どきどき	どっと
どんどん	にこにこ	のろのろ	のんびり
ばたばた	はっきり	ばったり	はっと
ぱっと	はらはら	ばらばら	ぴかぴか
びっくり	ぴったり	ふと	ふらふら
ぶらぶら	ぶるぶる	ぺこぺこ	ぺらぺら
ぼうっと	ほっと	ぼんやり	めちゃくちゃ
ゆっくり	わくわく		

三上が提案した70語の基本擬音語と擬態語を本稿で取り上げられている日本語教科書の擬音語と擬態語とを比較してみると，三上が提案した語の中で32語が今回の教科書に現れていないことがわかった。上記の網掛け部分は日本の日本語教科書に出現した語，［　　］語 の部分は中国の日本語教科書のみ出現した語である。日本語教科書の教授内容によって該当の擬音語や擬態語が選定されているかと思うが，初中級学習者向けの擬音語と擬態語の選定や指導内容の見直しは今後更なる検討が必要となってくるだろう。

6．擬音語と擬態語の面白さ

日本語の擬音語・擬態語は実に面白いものだと思う。これらの表現を用いることによって，音や状態を細緻に描写することができるし，生き生きとした自然な日本語を表すこともできる。これは日本語の特色の一つだと言える。また，擬音語・擬態語が習得できれば，日本語の表現の豊かさ，また漫画鑑賞の面白さがいっそう高まることが期待できるだろう。

では，下記の例文において，擬音語と擬態語が用いられたものと用いられていないものとを比較してみよう。

(1a)　そんなに見ないでよ。
(1b)　そんなにじろじろ見ないでよ。
(2a)　ちょっと見ただけで，あまりよく覚えていません。
(2b)　ちらっと見ただけで，あまりよく覚えていません。
(3a)　リンさんは日本語が話せます。
(3b)　リンさんは日本語がぺらぺらです。
(4a)　シチューは１時間ぐらい煮込めば，できあがります。
(4b)　シチューは１時間ぐらいことこと煮込めば，できあがります。

（許 2012：22～59）

（1b）の「じろじろ」は，遠慮なく他人を頭から足もとまで見る様子を表すときに用いられる。（1a）には，（1b）の意味が含まれていないため，相手がどのように見ているのかがよくわからない。（2b）の「ちらっ」は，比較的に小さいものが速いスピードで一回転した様子を表すときに用いられる。（2a）の「ちょっ」は，「わずか」「少し」という意味を表す。（2a）の「ちょっ」は量を表しているのに対し，（2b）の「ちらっ」は速さと量を表している。（3a）では，リンさんは日本語を話すことができるという意味を表している。それに対し，（3b）の「ぺらぺら」は軽くて速いという意味で外国語が流暢に話せる様子を表すため，リンさんがどのくらい日本語が話せるのかを詳しく説明することができる。（4b）の「ことこと」は，硬いものが互いにぶつかった音を表すときに用いられる。また，時間をかけて料理を煮込むときにも用いられる。（4a）では，実際の料理中の様子がよくわからない。このように，日本語では擬音語と擬態語が用いられると，物事の状態や音声がわかりやすくなるし，生き生きとした日本語が表現できる。

中国語は，表意文字であるため，音声面では日本語の擬音語ほど生産的ではない。中国語には擬態語という用語がないため，物事の状態を表す表現には，形容詞を借りたもの（例えば，「摇摇晃晃」（ふらふら），「热乎乎」（ほかほか），「飘飘」（ひらひら）），成语（ことわざ）（「津津有味」（興味津々）など），实词

(形容詞「直爽」(さっぱり), 動詞「瞥」(ちらっ(と見る)),「慢慢」(ゆっくり)など)と, 擬音語(「乎乎」(ひゅうひゅう(風), ぐっすり(寝る)など)から発展してきたものがある。

一方, 英語では "ticktock ticktock"(チクタク(滴答滴答)「時計の音」), "clickety-clack"(ガタンゴトン(中国語には適切な表現がない)「車輪の音」)のような擬音語はあるが, 日本語ほど多くないし, 多くの擬音語と擬態語は動詞("to stare" じっ(一动不动), 副詞("work energetically" ばりばり(干劲足)), 形容詞("exciting" わくわく(扑通扑通))で表現されることが多い。

7. 日本語学習者向けの擬音語・擬態語の指導

日本語の擬音語・擬態語は, 数と形態の種類が多く, 1冊の辞典になるほどである。音声的にも, またニュアンス的にも表現の微妙な違いがあるため, 学習者が全部覚えるのは難しいと思う。筆者は, 日常よく用いられる日本語の擬態語・擬音語(例えば,「日常動作」「態度」「調理」「心身」「自然」「生き物」「物事」など)を取り上げ, これらの意味用法を, 例文を用いて説明し, また類似表現や関連知識を紹介し, 表現練習を通して学習者の擬音語・擬態語に対する理解を深めることが必要であると思っている(許2012)。

授業では学習者からよく「形の似ている類似表現」や「同じ場面でよく用いられる他の表現」などの質問が寄せられる。これらを念頭に, 擬音語と擬態語の学習指導を行う際, 同音異義の表現や類似表現のニュアンスの違いに着目し, 表現を選択することが肝心である。

例えば, 擬音語の半濁音の「ぱりぱり(咯嘣咯嘣 "crisp")」は「連続的に軽くて薄い食べ物を噛み砕く音」を表すときに用いられるのに対し, 半濁音の「ぽりぽり(咯吱咯吱)」は「小さくて硬い食べ物(節分のときに食べる「福豆」など)を噛み砕く音」を表すときに用いられる。一方, 濁音の「ばりばり」は「硬くて薄いものが砕ける音」を表すこともできるし, 擬態語へと転じて,「一生懸命に何かをする様子」(干劲足 "to work energetically")を表すこともできる。

また,「にこにこ(笑嘻嘻 "smile happily")」は「優しそうな表現で笑っている様子」を表すときに用いられ, 人に優しくてうれしい感じを与える。小さい「っ」の付いている「にっこり」は「にこり」より笑う時間が短く,「一瞬に微笑みを浮かべる様子」を表すときに用いられる。

その他, 同じ物の表面の滑らかさについて描写する表現には「つやつや(光润 "glossy")」,「ぴかぴか(闪闪发光 "shine")」,「すべすべ(光滑 "smooth")」があるが, 表現のニュアンスが違う。「つやつや」は「表面に水分と脂がついて, 光っている様子」を表すのに対し,「ぴかぴか」は, 物の表面が滑らかで光っていて, 新品のような様子を表す。一方,「すべすべ」は子どもの肌のような滑らかさを表す。

日本語の授業で擬音語と擬態語の表現のみを指導するのは実に難しいと思う。なぜなら, 擬音語の音声や擬態語の状態描写が表現のみでは理解しにくいからである。そこで, 筆者の実践では, 授業で擬音語と擬態語の表現を導入する際, インターネットを通じて, 動画の音声や画像, 絵, 写真を表現と結びつける。例えば, 小鳥のさえずりをまねた「ぴよぴよ」という擬音語を導入するのにまず小鳥の動画を学習者に見せ, その音声を日本語でどのように表現するのかを当ててもらう。そうすると, 言語によっていろいろな表現のバリエーションが出てくるし, そこからまた話題を広げることができる。こうして視聴覚の効果を活かして, 学習者の想像力を働かせて学習者の該当の表現への理解や印象を高めることができると思う。

まとめ

本稿で取り上げた日常よく出会う日本語の擬音語と擬態語はわずかではあるが, 擬音語と擬態語とはどのようなものであるか, また擬音語と擬態語が日本語においてどのような位置づけを示しているか, 擬音語と擬態語の表現がなぜ面白いのか, などについて述べられたと思う。拙論により, 日本語学習者が日本語の擬音語と擬態語への認識や興味をいっそう高めることができれば幸いである。

参考文献

崔梨香(2003)「日中両言語の擬態表現の相違 ― 漫画の例をもとに ―」東京学芸大学大学院教育学研究科修士学位論文

新村出(1998)『広辞苑(第五版)』岩波書店

瀬戸口律子(1984)「擬音語・擬態語表現(日本語 ― 中国語)について」『大東文化大学紀要人文科学』22, pp.1-17

田守育啓・ローレンス・スコウラップ(1999)『オノマトペ ― 形態と意味 ―』くろしお出版

田守育啓(2003)『<もっと知りたい!日本語>オノマトペ擬音・擬態語を楽しむ』岩波書店

陳羌（2014）「日本と中国の初級日本語教材におけるオノマトペの考察」東京学芸大学大学院教育学研究科修士学位論文

日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典』大修館

飛田良文・浅田秀子（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂

菱沼透　他編（2002）『日中辞典』小学館

許夏玲（2012）『日本語の擬音語と擬態語』（電子書籍）（http://ebooks-2language.wook.jp）

許夏玲（2013）「日本語の擬音語と擬態語の面白さ」The Japan Society of Hong Kong 50th Anniversary Commemorative Volume, pp.163-166

三上京子（2006）「日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化」『ICU日本語教育研究』3,『ICU日本語教育研究』編集委員会，pp.49-63

日本語学習者向けの擬音語・擬態語の学習指導

A Study Guidance for the Japanese Learners on Onomatopoeia and Mimetic Words

許　　夏　玲*

Harling HUI

留学生センター

Abstract

This paper examines the definition of the Japanese onomatopoeia and mimetic words. Moreover, the researches on the onomatopoeia and mimetic words of the Japanese language textbooks show the tendency of the types and the use of those words in recent Japanese education. Besides, I also suppose the study guidance as well as my teaching practice of learning Japanese onomatopoeia and mimetic words for the elementary and the intermediate Japanese learners.

Keywords: onomatopoeia, mimetic words, definition, Japanese learners, study guidance

International Student Exchange Center, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨:　本稿では，擬音語と擬態語とはどのようなものであるか，これまでの研究を踏まえて擬音語と擬態語の範疇と認定する基準について再考察した。また擬音語と擬態語が日本語学習においてどのような位置づけを示しているか，日本と中国の日本語教科書の調査結果をもとに明らかにした。日本語教育の観点から初中級の日本語学習者向けの擬音語と擬態語の指導や筆者の実践内容などについても提示した。

キーワード: 擬音語，擬態語，定義，日本語学習者，学習指導

*　Tokyo Gakugei University（4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan）